



大学のサークルにおけるスラングの浸透とそれにか
かわる待遇性：
別れの場面で使われる「おつかれさま」を例に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 塩原, 淳平 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00002782

大学のサークルにおけるスラングの浸透とそれにかかわる待遇性 —別れの場面で使われる「おつかれさま」を例に—

塩原 淳平

1. はじめに

本稿では、大学のサークルという集団において、別れのあいさつとして使われる「おつかれさま」というあいさつ表現に焦点を当て、このあいさつ表現がスラングとして集団内にどのように浸透しているかを論じる。

大学生の別れのあいさつ表現を扱った研究として、主にキャンパス内でのあいさつ表現の使用実態をアンケート調査によって明らかにした米川（1990）があげられる。別れのあいさつに限らず、このような、キャンパスことばを考察の対象とした研究は、他にも数多く見られるが（都染1999、洞澤2000など）、集団語の下位分類とされる（渡辺1981）これらの表現が、具体的な集団において、どのような相手に使われているのか、また、それが集団内においてどのように広がっているのかという観点からの研究はあまり見当たらない。篠崎（1997）のように、流行語の地理的伝播のパターンを分析した研究もあるが、具体的な集団を対象としたものではない。

本研究は、大学のサークルという具体的な集団を対象とした調査の結果から、集団内へのスラングの浸透について述べる。また、その際にかかわる、上下関係という待遇性の問題、あいさつ表現の対称性、といった諸要因についても分析の対象とする。

以下、§2では、「おつかれさま」という別れのあいさつ表現の機能について述べ、それがスラングとしての機能を持つことを確認し、§3で調査方法について触れる。そして§4では、主に話し相手との上下関係から、集団の構成員がこの表現をどのような要因によって選択するかを論じる。

2. 「おつかれさま」の機能

2.1. あいさつ表現としての「おつかれさま」の機能

従来、「おつかれさま」という表現は、話し相手をねぎらう表現であり、慰労の対象となる行為が存在する場合に使用される表現である。そして、この表現は次の(1)のように、別れのあいさつとして使われることもある。

- (1) [アルバイトを終えて、アルバイト先の同僚と別れる場面で]
「おつかれさま」

しかし、本研究で行った調査では、次の(2)のような用法があることが明らかになった。

- (2) [大学のサークルの友人と校内の食堂で食事をして、その後の別れの場面で]
「おつかれさま」

(1)の場面では、アルバイトという慰労の対象となる労働行為が行われているので、ここで使用される「おつかれさま」は慰労の機能を果たすことのできる表現である。しかし、(2)の場面では、慰労の対象となる行為は行われておらず、「おつかれさま」が慰労の機能を果たしているとはいいがたい¹。

よって、(1)の場面で使われる「おつかれさま」は、慰労の機能と別れを告げる機能を持つあいさつ表現であるが、(2)の場面で使われる「おつかれさま」は、意味の漂白化が起こり、慰労の機能が失われ、別れを告げる機能のみを持つようになったあいさつ表現であると考えられる。このように、「おつかれさま」には(2)のような、「慰労」という本来の意味が失われた用法がある。この点で、「おつかれさま」は、他の別れのあいさつ表現とは性質が異なるといえる。

¹ なお、本研究で行った調査では、「友人との食事」という場面において使われる「おつかれさま」は、慰労の機能を持たないということを回答者全員から確認している。

たとえば、次の(3)～(5)の発話は別れの場面におけるあいさつ表現であり、別れを告げる機能を果たしているといえるが、(3)と(4)、(5)は、「おつかれさま」と比較すると、それぞれレベルの異なるあいさつ表現であることが指摘できる。

(3) [友人と旅行から帰って来て、別れ際に]

「じゃあね」

(4) [病院で医師が患者の診察を終えて、その後の別れ際に（医師が患者に対して）]

「お大事に」

(5) [飲食店で代金を支払い、その後の別れ際に（店員が客に対して）]

「ありがとうございました」

(3)の「じゃあね」は [] 内の場面において、別れを告げる機能のみを持つ。一方、(4)の「お大事に」は [] 内の場面において、別れを告げる機能を持つが、同時に相手の体調を気づかう、という別の機能をも持つ。同様に、(5)の「ありがとうございました」も [] 内の場面において、別れを告げる機能と同時に感謝の機能を持つ。

つまり、「じゃあね」はさまざまな別れの場面で使えるあいさつ表現であるが、別れを告げる機能以外は持たず、別れの場面以外では使われない²。それに対して、「お大事に」や「ありがとうございました」は、別れの場面において、別れを告げる機能と同時に他の機能を同一場面のなかで持ち、別れの場面以外でも使われることがある。そのため、[] 内の場面が変われば、同じ別れの場面であっても、次の(6)のような不適切なあいさつ表現となる。

(6) [友人に昼食をごちそうになり、その後の別れ際に（友人は体調が悪くないとして）]

「お大事に」

² 「その服は気に入らない？じゃあねー、これはどう？」のような接続表現的なものは、あいさつ表現ではないので、ここでは触れない。

これらのことから、別れのあいさつ表現は機能面から大きく分けて次の3つに分類することができる。

- A. 別れを告げる機能のみを持つ表現（「じゃあね」など）
- B. 「別れを告げる機能と同時に他の機能をも持つ」用法の他に、場面によって「別れを告げる機能のみを持つ」用法がある表現（「おつかれさま」）
- C. 別れを告げる機能と同時に他の機能をも持つ表現（「お大事に」、「ありがとうございました」など）

上で挙げたあいさつ表現のバラエティと機能の関係を場面ごとに表1で示した。

表1 場面ごとのあいさつ表現と機能の対応

場 面		別れ以外の場面	別 れ の 場 面	
機 能		他の機能	別れを告げる機能+他の機能	別れを告げる機能
表現の分類	A	×	×	○
	B	○	○	○
	C	○	○	×

別れのあいさつとして用いられる「じゃあね」はAに分類される表現である。別れの場面において、別れを告げる機能のみを持ち、別れ以外の場面では用いられない。また、「お大事に」や「ありがとうございました」はCに分類される表現である。別れの場面において、別れを告げる機能と同時に、相手の体調を気づかう、感謝、という機能をも同時に持ち、さらに、別れ以外の場面においても、相手の体調を気づかう、感謝、という機能を持つ。

一方、Bに分類される「おつかれさま」は、(1)のような別れを告げる機能と同時に他の機能（慰労の機能）をも持つ表現としての用法と、(2)のような、他の機能（慰労の機能）を失い、別れを告げる機能のみを持つ表現としての用法がある。そのため、AとCのどちらにも分類されない。(2)のような用法は、現時点では一般的

な用法とはいえず、誤用ともされうる表現である。この点で、「おつかれさま」は意味の漂白化の起こった別れのあいさつ表現であるといえる。

2.2. スラングとしての「おつかれさま」の機能

真田（1992）では、スラングの機能として「メンバー相互の連帯感や仲間意識を確認する」機能があげられている。

本稿で注目する「おつかれさま」というあいさつ表現の、別れを告げる機能のみを持つ用法は、別れの場面において、慰労の対象がない場合でも慰労表現を使うという点で特殊な用法であり、それゆえにこの表現は表1でBに分類された。このような用法は、一般社会において「誤用」「ことばの乱れ」とも捉えられうるものだが、この「誤った」あいさつは「メンバー相互の連帯感や仲間意識を確認する」機能を持つと考えられる。つまり、一般社会で用いられるような「正しい」あいさつではなく、「誤った」あいさつをあえて仲間同士で用いることによって、仲間同士の心理的な結合が強化されるのである。

このことから、別れの場面における「おつかれさま」の別れを告げる機能のみを持つ用法は、スラングとしての機能を持つといえる。

本研究で行った調査の結果、この用法が、大学のサークルという集団に浸透していることが確認された。次の§3では調査の概要について触れる。また、§4では調査結果をもとに、「おつかれさま」が、どのような要因で、どのような相手に対して選択されるかを分析する。

3. 調査の概要

3.1. 調査対象

本調査は大阪府立大学の軽音楽サークルを対象として行った。

当該集団には、5年間（2000～2004年）筆者が所属しており、その経験から、本研究で注目する「おつかれさま」という表現が観

察されやすいと考えたからである。

本調査を実施した2004年11月、12月の時点でのサークル構成員の総人数は58名であり、インフォーマントはその中の42名である。インフォーマントの内訳を表2に示した。なお、インフォーマントの人数は、筆者の内省（調査当時、学部4回生）を含むものである。

表2 回答者の属性と人数

() 内は所属者数 単位：人

		男	女	合計
学年 (入学年度)	院1・獣医5 (2000)	3 (5)	0 (0)	3 (5)
	学部4回生 (2001)	7 ³ (7)	5 (8)	12 (15)
	学部3回生 (2002)	5 (11)	4 ⁴ (4)	9 (15)
	学部2回生 (2003)	5 (5)	3 (3)	8 (8)
	学部1回生 (2004)	5 (10)	5 (5)	10 (15)
合 計		25 (38)	17 (20)	42 (58)

3.2. 調査方法

調査法は、リーグ戦方式を適用した。なかでも真田（1973）、姜（1997）などで採用されているこの調査法は、「上下」「親疎」といった抽象的な人間関係から話し相手を設定するのではなく、集団に所属する実在の人物を設定するものである。日常的な習慣としての性格が強いあいさつ行動を調査するためには、インフォーマントが具体的な対人関係を理解したうえで回答することができると望ましいと考えたため、この調査法が有効であると考えた。

なお、調査はインタビュー形式で行い、設問に対して自分ならどのように言うかを自由に回答してもらった。その際に、「おつかれ

³ 1年留年している回答者（2000年入学）2名を含む。

⁴ 大阪女子大学の学生を1名含む。

さま」の使用の有無については確認していない。また、調査の様子をテープレコーダーで録音した。インフォーマントの総人数はサークルの構成員全数には満たなかったが、学年、性という属性ごとの人数のデータをバランス良く集めることができた。

3.3. 調査項目

本調査では、慰労の機能を持つ「おつかれさま」と、慰労の機能を持たない「おつかれさま」の出現状況に注目するため、以下の2つの質問を設定した。さらに、これらに加えて状況を説明するイラストを提示した。

質問1. ○○さんと一緒に大学の食堂で昼食を食べました。その後の別れ際にどんなあいさつをしますか。

質問2. ○○さんとボックス⁵でバンド練習をしました。その後の別れ際にどんなあいさつをしますか。

なお、調査の所要時間はインフォーマント1名あたり30分程度であった。

4. 「おつかれ系」の出現状況の分析

4.1. 表現形式の記号化

まず、回答された表現形式を表3のように記号化した。得られた回答のうち、「オツカレ」、「オツカレサマデス」、「オツツー」などの、「おつかれさま」のバラエティ（以下、「おつかれ系」と称する）には黒い図形記号を与えている。

次に、表3にしたがって、食事場面・練習場面におけるリーグ表（表4、表5）を作成し、巻末に示した。黒い図形記号は、表4（食事場面）においては非慰労表現、表5（練習場面）においては慰労

⁵ キャンパス用語。サークル活動で使われる部屋

表現である。

なお、本稿において、これら2つのリーグ表（表4、表5）はあくまで補助的な資料であり、具体的な分析は数値化されたデータを用いる。

表4、表5では、インフォーマントが1つの場面で複数の回答をした場合は、1つ1つの回答を「/」で区切り、「●/@」のように示した⁶。そして、「オサキニ、バイバイ」といった、1つのあいさつに2つ以上の表現が含まれる回答は「≤♪」のように示した。また、話し手の横に記された記号は、「○」が1年浪人、「◎」が2年浪人、「☆」が1年留年であることを示し、アルファベットのMは男性、Fは女性であることを示す。なお、（話し手、または話し相手の）サークルへの参加率が低い、サークル所属期間が短いといった理由から、「話し相手を知らない」という回答があったが、これは空欄とした。

4.2. 両場面の比較

表4（食事場面）、表5（練習場面）を見ると、どちらの場面でも黒い図形記号（「おつかれ系」の回答）が選択されていることがわかるが、これら2つの場面において選択された「おつかれ系」の機能は異なる。

まず、練習場面で選択されている「おつかれ系」の回答は、「バンド練習」という慰労の対象となる行為が存在するため、別れを告げる機能と慰労の機能を持つ。この場面では、黒い図形記号が表の大部分を占めており、「おつかれ系」が別れのあいさつ表現として定着していることが読み取れる。

次に、慰労の対象が存在しない食事場面に注目する。先にも述べたように、食事場面において「おつかれ系」の回答を1つでも選択

⁶ 「●/@」のような、「慰労表現と慰労表現以外」というような複数回答は、統計処理を施す際に、慰労表現の回答としてカウントした。

表3 表現形式の記号化

●	オツカレサマデ (一)ス(一)	(	ジャー	+	マタ	♪	バイバ(一)イ	≤	オサキニ
■	オツカレサマデ シタ(一)	)	ジャーネ(一)	±	マタネ(一)	b	バーイ	≡	オサキ
◆	オツカレサンデ (一)ス(一)	「	ジャ	÷	マタナ	@	シツレーシマス	≪	コンド
▲	オツカレデ(一) ス	」	ジャーナ	…	ホナ	♀	オサキデスー	≥	総会 ⁷ デ
▼	オツデス	『	ホンジャー	:	ホナネ	—	ウッス	<	ガンバツテ
★	オツカレッス	』	ホンジャ	・	ホンナラネ	—	ハイ	≫	ソノウチ
♥	オツカレデシタ	《	ホンジャーナ	…	ホナナ		オー	>	バンド ガンバ レヨ
♠	オツカレサマ (一)	一	ホンナラ	,	ンナナ	・	ドウモ	コ	アシタネ
♣	オツカレサ(一) ン	》	ホンジャーネ (一)	#	サヨーナラ	—	デワ	シ	アシタ
♣	オツカレサンデ シタ	[	ンジャーネ(一)	\$	サイナラー	∫	アー	≡	ライシュー
■	オツカレ(一)	]	ンジャーナ	&	サヨナラ	↑	相手の名前(あ だ名) ⁸	≡	チャントコイヨ
➡	オッツー	【	ンジャネ(一)	{	ソレジャー			∈	ヨカッタデス
♣	オツ(一)	〉	ンジャナ	}	ソレジャーネ (一)			U	ヨロシク
➡	モッツー	〔	ンジャー	[	ソレジャ			∩	ヨロシクオネガ イシマス
		】	ンジャ	]	ソンジャ			∧	チャント オボ エテナ

⁷ なお、本研究で行った調査では、「友人との食事」という場面において使われる「おつかれさま」は、慰労の機能を持たないということを回答者全員から確認している。

⁸ 「その服は気に入らない？じゃあねー、これはどう？」のような接続表現的なものは、あいさつ表現ではないので、ここでは触れない。

したインフォーマントは全員、食事という行為を慰労の対象とは認めていないことが確認された⁹。よって、ここで選択されている「おつかれ系」の回答は、食事に対する慰労の機能を持つ表現ではなく、意味の漂白化が起こり、別れを告げる機能のみを持つようになった表現であると考えられる。

この場面（表4）においては、総回答数2266のうち、黒い図形記号の選択（「おつかれ系」の回答）は1163（51.3%）である¹⁰。一方、練習場面（表5）における総回答数は2266、黒い図形記号の選択（「おつかれ系」の回答）は2164（95.5%）である。つまり、食事場面（表4）においては、黒い図形記号の選択（「おつかれ系」の回答）が練習場面（表5）ほどは多くなく、「おつかれ系」以外のバラエティも選択されていることがわかる。

以下では、食事場面（表4）における黒い図形記号の分布状況に注目し、意味の漂白化の起きた「おつかれ系」が集団内においてスラングとしての機能を持つこと、それらがどのように集団内に浸透しているのかを述べる。なお、本稿は、慰労の機能を持たない「おつかれ系」の発生について論じるものではなく、調査時点における集団内への浸透の状況を論じるものである。

4.3. 食事場面における「おつかれ系」の選択率と上下関係のかかわり

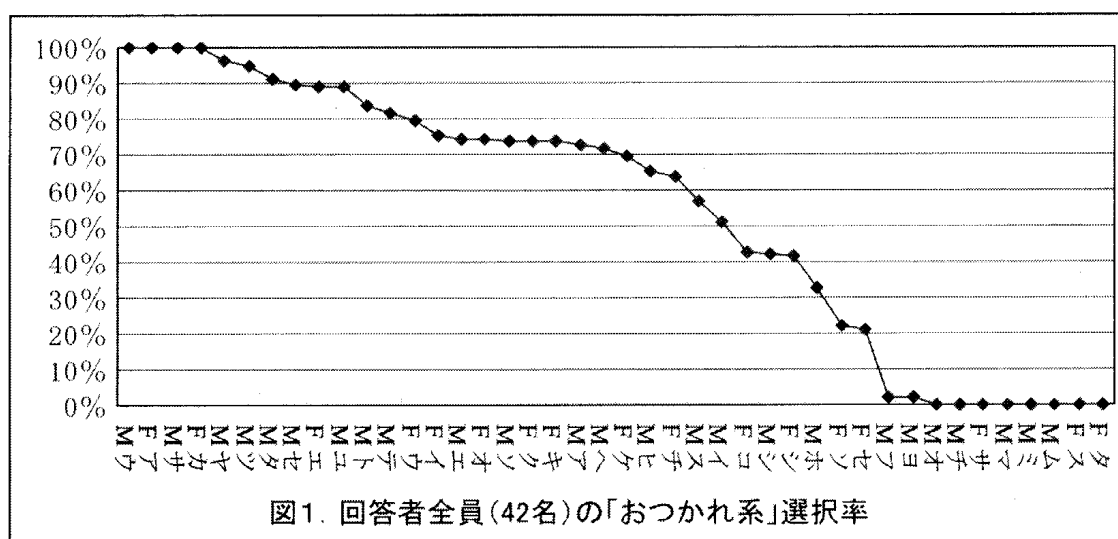
まず、表4（食事場面）において、各話者がどの程度「おつかれ系」を選択しているかに注目する。下の図（図1）は、食事場面における「おつかれ系」の選択率（回答者一人一人の総回答数における「おつかれ系」の選択数の割合）を高さ順に並べたものである。

図1を見ると、選択率が0%の回答者は8名である。よって、こ

⁹ フォローアップインタビューとして、「そのあいさつ（おつかれ系）には、話し相手をねぎらう意味がこもっていますか」という質問をした。

¹⁰ 「話し相手を知らない」という回答は、総回答数に含めていない。

の8名以外の回答者（34名）は、最低でも1名の話し相手に対して「おつかれ系」を選択しているということになる。また、選択率70%付近で曲線の上昇が左に向かって緩やかになる。選択率が70%を超える回答者は21名（総回答者は42名）であり、このあいさつ表現が、当該集団内において、別れのあいさつとしてある程度は定着していることがうかがえる。



先に述べたように、食事場面で用いられる「おつかれ系」は、慰労の対象となる行為が存在しないという点で、誤用ともされうる表現である。なお、当該集団内においても、「おつかれ系」の選択率が0%の回答者から、「食事場面での「おつかれ系」の選択には違和感がある」「この表現はおかしい」という内省を得ている。

以下では、「おつかれ系」の選択状況を話し相手との上下関係に注目して分析する。そして、その浸透にはどのような要因がかかわるかということについて考察する。

4.3.1. 各学年に対する「おつかれ系」の出現率

表4を見ると、話し相手が先輩の部分（太線の枠の右側）は黒い記号（「おつかれ系」の回答）が多く、話し相手が同級生の部分（太線の枠内）は黒い記号が比較的少ない傾向にある。ここで、「おつ

かれ系」の選択と上下関係のかかわりに注目するため、回答者全員の先輩、同級生、後輩に対する「おつかれ系」の出現状況を示す（表6）。

表6 回答者全員の先輩、同級生、後輩に対する「おつかれ系」の出現状況

	後輩	同級生	先輩
「おつかれ系」の出現数	367	154	745
総回答数	853	499	914
「おつかれ系」の出現率	43.0%	30.9%	81.5%

表6では、全体の傾向として、先輩・同級生・後輩に対する「おつかれ系」の出現率に明らかな違いがみられ、「おつかれ系」の回答の選択に上下関係が関わっていることがわかる。

次に、「おつかれ系」の回答の出現率が、話し相手の学年によってどのように変化するか注目するため、学年ごとの各学年に対する「おつかれ系」の回答の出現率を図2～6で、総回答数・出現数を表7で示す。なお、図2～6のグラフでは、回答者と同級の棒の色を濃く示した。

表7 各学年に対する「おつかれ系」の出現数

()内は総回答数

話し相手 話し手	1回生	2回生	3回生	4回生	院1回生 獣医5回生
1回生	49(137)	62(80)	122(148)	115(123)	45(49)
2回生	78(113)	21(56)	95(120)	107(114)	39(40)
3回生	61(120)	33(72)	54(126)	100(135)	34(45)
4回生	40(123)	23(95)	39(180)	22(168)	26(60)
院1回生 獣医5回生	21(36)	12(24)	30(45)	30(45)	8(12)

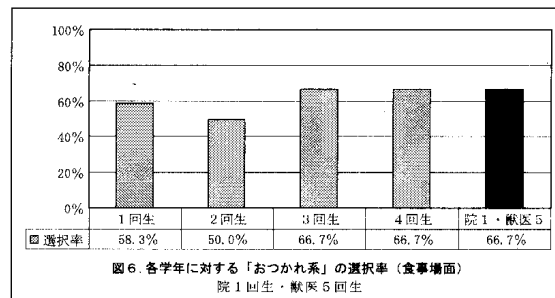
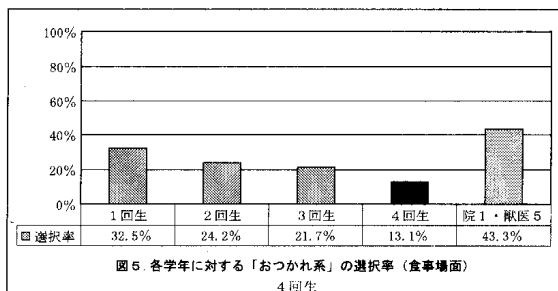
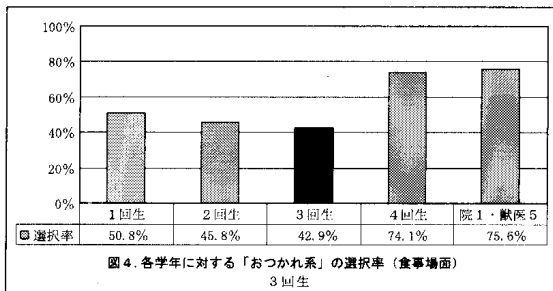
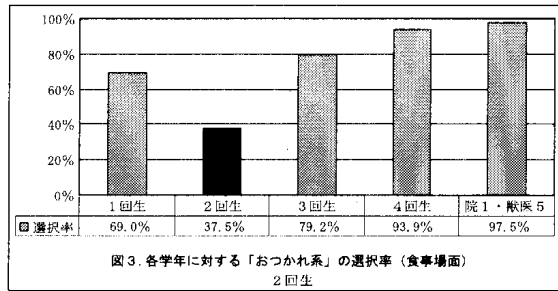
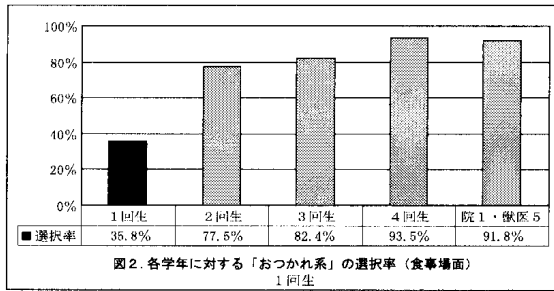


図2～6を見ると、全体的に同級生に対する出現率が低く、先輩に対する出現率が高いことが指摘できる。ただし、獣医5回生、院1回生は、先輩にあたる学年が存在しないため、これにはあてはまらない。

ところで、図2～5と比べると、図6はこれらとは異なった傾向を示していることに気づく。図2～5では、話し相手が同級生のときに「おつかれ系」の選択率をもっとも低くなっているが、図6では、話し相手が後輩である2回生のときに「おつかれ系」の選択率をもっとも低い。これは、獣医5回生、院1回生の回答者数が少なく（3名）、さらに、Mヤ、MユとMヨの選択パターンが大きく異なるためであると考えられる。表4（リーグ表・食事場面）を見ると、Mヤは総回答数54のうち「おつかれ系」の回答が52（選択率

96.3%)、Mユは総回答数54のうち「おつかれ系」の回答が48（選択率88.9%）であり、この2名は「おつかれ系」の回答ではほぼ一本化しているといってもよい。それに対して、Mヨの「おつかれ系」の回答は、1名（Mハ）に対してのみとなっている¹¹。よって、ここでは、1～4回生の各学年に対する「おつかれ系」の選択率に注目する。

1～4回生の出現率は、話し相手が同級生のときに最も低く、話し相手が先輩のときに最も高い。また、先輩にあたる学年が複数存在する1～3回生は、先輩に対する出現率が、最大値以外の値も同様に高い。よって、「おつかれ系」は先輩に対して使われやすく、同級生に対して使われにくい表現であるといえる。

また、後輩に対する出現率に注目すると、2～4回生の後輩に対する出現率は先輩に対する出現率よりも低く、同級生に対する出現率よりも高い。よって、「おつかれ系」は後輩に対しても使われやすいといえる。

4.3.2. 他のバラエティとのかかわり

「おつかれ系」の選択状況にみられるこのような傾向には、先輩に対して選択されうる「おつかれ系」以外の別れのあいさつ表現への意識がかかわる。本調査では、フォローアップインタビューとして、目上に対して用いられる「さようなら」や「失礼します」というあいさつ表現にどのような意識を持っているかを質問したところ、「おつかれ系」を1つでも選択した回答者のなかで、10名のうち

¹¹ なお、Mヨに対してフォローアップインタビューをおこなったところ、Mヨが別れの場面で用いられる「おつかれ系」のあいさつ表現に対して、「この表現（用法）はおかしい」「違和感がある」という意識を持っているため、基本的には使用しないということが確認された。このことから、「おつかれ系」は、当該集団に（集団構成員の全員が使用するわけではないという意味で）完全に定着している表現ではなく、話者の言語意識によって「使うか使わないか」というレベルでも使用状況が異なると考えられる。

9名がこれらのあいさつ表現に対して「サークル内で用いるには堅苦しい（よそよそしい）」という意識を持っていることが確認された。

このことから、先輩に対しては、同じサークルの構成員であるという仲間意識から、「さようなら」や「失礼します」のようなあらたまった表現を選択することによって心理的距離が遠ざかるのを避けるために、「おつかれ系」が選択されやすいと考えられる。また、「おつかれ系」には、「じゃあね」などとは異なり、「おつかれさまです（でした）」のような丁寧語形式が備わっている。スラングとしての文体の低さを持ちながら、目上に対しても使うことのできるあいさつ表現であるということも、先輩に対して用いられやすい原因の1つとして考えられる。

一方、同級生や後輩に対して使われる「おつかれ系」以外のバラエティの選択状況（表4）をみると、「バイバイ」が目立つ。ここで、同級生・後輩、それぞれに対する「おつかれ系」と「バイバイ」の選択状況を学年ごとに比較するため、表8と表9を示す。ただし、ここでは上で述べた理由から、院1回生、獣医5回生のデータは分析対象には含めない。

表8 同級生に対する「おつかれ系」と「バイバイ」の選択状況

学 年	表 現		
		バイバイ	おつかれ系
1	回 生	41.6%	35.8%
2	回 生	39.9%	37.5%
3	回 生	33.6%	42.2%
4	回 生	28.6%	13.1%

表9 後輩に対する「おつかれ系」と「バイバイ」の選択状況

学 年		表 現	バイバイ	おつかれ系
1	回 生			
2	回 生		11.5%	69.0%
3	回 生		32.6%	48.7%
4	回 生		41.1%	34.1%

表8と表9を見ると、同級生・後輩に対しては、「バイバイ」という表現が用いられているため、結果として、先輩が話し相手の場合よりも「おつかれ系」の選択率が高くないということがわかる。つまり、先輩に対するあいさつ表現のバラエティとは異なり、同級生や後輩に対する別れのあいさつ表現のバラエティには「おつかれ」や「おっつー」などの「おつかれ系」以外にも、「バイバイ」などのくだけた表現が備わっているため、同級生・後輩が話し相手のときは、話し相手が先輩のときほど「おつかれ系」の選択が多くはないのである。

4.3.3. 「おつかれ系」の選択パターン

「おつかれ系」の選択状況は、学年ごとに見ると、先輩、後輩に選択されやすく、同級生に選択されにくい傾向にあった。しかし、図1を見ると、「おつかれ系」の選択率には個人差があり、回答者によって選択の状況が異なることがわかる。ここで、回答者ごとの「おつかれ系」の選択のパターンに注目するため、表10を示す。表10は、上下関係による「おつかれ系」の選択状況にみられる傾向を分類したものである。先に示した図1において、「おつかれ系」の選択率70%付近で曲線の上昇が安定していることから、選択率が70%を超えるかどうかを「多い」「少ない」の基準として設定した。したがって、表10においては、「少ない」は「おつかれ系」

の選択率（「おつかれ系」の選択数／総回答数）が70%未満、「多い」は「おつかれ系」の選択率が70%以上であることを示す。また、選択率が高くなるにつれて、網かけの色を濃くした。

表10 「おつかれ系」の選択傾向の分類（食事場面）

選択パターン	先輩に対して	同級生に対して	先輩に対して	人数	内 訳
A	どの話し相手にも選択しない			8名	Mオ、Mチ、Fサ、Mマ Mミ、Mム、Fス、Fタ
B	1名に対してのみ選択する			2名	Mフ、Mヨ
C	少ない	少ない	少ない	1名	Mシ
D	多い	少ない	少ない	8名	Mス、Fコ、Fシ、Mホ Fセ、Fソ、Fキ、Fケ
E	多い	少ない	多い	6名	Mセ、Mソ、Fク、Mヒ Mへ、Fチ
F	多い	多い	多い	4名	Mタ、Mツ、Mテ、Mt
G	全員に対して選択する			4名	Mウ、Fア、Mサ、Fカ
H	多い	少ない		6名	Mア、Mエ、Fイ、Fオ Fウ、Fエ
I	少ない	少ない		1名	Mイ
J		多い	多い	2名	Mヤ、Mユ

表10から、食事場面における「おつかれ系」は、回答者によって選択の傾向が異なることがわかる。

まず、選択パターンのA「どの話し相手にも選択しない」とB「1名に対してのみ選択する」に分類される回答者をみる。選択パターンAとBに分類される回答者10名（筆者を含む）は全員、食事場面における「おつかれ系」の使用に対して「違和感がある」「おかしい」という意識を持っているため、選択していないということが確認された。

ここで注目したいのは、選択パターンBに分類される2名の回答

者（Mフ、Mヨ）が、そのような意識を持っているのにもかかわらず、1名に対して「おつかれ系」を選択しており、その相手が同一の人物（Mハ）であるということである。フォローアップインタビューの結果、Mフ、Mヨの両名から『「Mハ」が自分に対して頻繁に「おつかれ系」を使うため、自分も使っている』という内省を得た。これは「相手と同じあいさつを交わす」という「あいさつ表現の対称性」（沢木・杉戸1999）によるものであり、このような要因で「おつかれ系」が集団内に浸透しつつあるということも考えられる。

次に、選択パターンC～Gに注目する。これらのパターンに分類される回答者は、どの回答者も先輩に対する「おつかれ系」の選択率が高い。これは、同級生や後輩と比べて、先輩に対する別れのあいさつ表現が「おつかれ系」で統一されつつあることを示す。これは、4.3.2.でとりあげた、「さようなら」や「失礼します」というあいさつ表現に対する「堅苦しさ（よそよそしさ）」という意識、そして、「おつかれ系」に丁寧語形式が備わっていることが原因であると考えられる。

また、選択パターンC～Gで注目されるのは、同級生・後輩に対する「おつかれ系」の選択が「多い」場合、先輩に対しても例外なく「多い」という点である。同級生に対する選択は「多い」が、先輩に対する選択は「少ない」というパターン、あるいは後輩に対する選択は「多い」が、先輩に対する選択は「少ない」というパターンは1つも見当たらない。これは、選択パターンH、Iに注目した場合でも同じことが当てはまる。

つまり、話者一人一人の選択パターンに注目した場合でも、「おつかれ系」は先輩に対して用いられやすく、「おつかれ系」の選択には、上下関係という待遇性の問題がかかわっているということがわかる。

また、選択パターンC～Gの同級生・後輩に対する選択パターンから、「おつかれ系」の選択が同級生に対して「多い」場合、後輩

に対しても「多い」。このことから、「おつかれ系」は同級生よりも後輩に対して用いられやすいということが指摘できる。この傾向は、先にあげた「あいさつ表現の対称性」によるものではないかと考えられる。

後輩から先輩に対しては、「オツカレサマデス」などの（「おつかれ系」の）あいさつが用いられやすいことはすでに確認した。ここで強調したいのは、後輩から先輩に対して「おつかれ系」のあいさつが用いられたときに、その返事として返されるあいさつ表現が相手と同じ（対称的な）表現になりやすいという点が、「おつかれ系」が同級生よりも後輩に対して用いられやすいという傾向に影響しているのではないかとということである。つまり、先輩が、相手との連帯感を強めようとする意識から、後輩からの「おつかれ系」のあいさつに対して、「バイバイ」や「ジャーネ」などではなく、相手と同じ「おつかれ系」あいさつを返す。それが、後輩に対する「おつかれ系」の選択を促進していると考えられるのである。

5. まとめ

別れを告げる機能のみを持つ「おつかれ系」が、スラングとして大学のサークルという集団へ、どのような要因によって浸透しているかについて述べた。「おつかれ系」の浸透の過程にかかわる要因を、以下で簡単にまとめる。

- ① 上下関係という待遇性の問題。
- ② 「おつかれ系」には丁寧語と普通語のどちらの形式も備わっているという、表現形式の問題。
- ③ あいさつ表現の「対称性」という言語行動の問題。
- ④ 「さようなら」や「失礼します」という、先輩に対して用いられるあいさつ表現に対する「堅苦しさ（よそよそしさ）」という言語意識の問題。

従来、スラングは文体の低いことばとして扱われ、場合によっては「日本語の乱れ」ともされる。しかしながら、本研究で調査対象

とした大学のサークルという集団においては、心理的距離を近づけるために、同級生よりも後輩に、後輩よりも先輩に対して選択されやすいということが確認できた。スラングでありながら、先輩という目上の相手に対する普及の度合いが高く、最も心理的距離が近いと思われる同級生に対する普及が低いという知見が得られたことは、今後、スラングの浸透について考えるうえで、意義深いものであると考える。

さらに、本研究では、リーグ戦方式という調査法が、集団におけるスラングの浸透を論じる際に有効であることが確認できた。今後、スラングが集団に浸透する過程を実証的に研究するための第1歩を踏み出すことができたといえる。

最後に、本稿では、考察の対象があいさつ表現であったため、その「対称性」という性質が集団内への浸透を促進するのではないかと考えられた。では、あいさつ表現以外のスラングではどのような要素が伝播の要因となるのか。さらに、その伝播の仕方に集団差は存在するのだろうか。これらの疑問点の解明を今後の課題としたい。

参 考 文 献

- 姜錫祐 (1997) 「大学応援団の待遇行動」『言語』26-6 大修館書店
- 真田信治 (1973) 「越中五箇山郷における待遇表現の実態 一場面設定による全員調査から一」『国語学』93
- 真田信治 (1992) 「属性とことば」『社会言語学』おうふう
- 沢木幹栄・杉戸清樹 (1999) 「世界のあいさつ言葉の対照研究に向けて一あいさつ言葉への視点」『国文学 解釈と教材の研究』44-6 學燈社
- 篠崎晃一 (1997) 「流行語の発生と伝播」『国文学 解釈と教材の研究』42-14 學燈社

- 都染直也（1999）「キャンパスのあいさつことば」『国文学 解釈と教材の研究』44-6 學燈社
- 洞澤伸（2000）「若者たちの言語生活に見られる他者の不在 —岐阜大学「キャンパスことば」とその周辺事情の考察—」岐阜大学地域科学部研究報告第6号
- 米川明彦（1990）「大学生のことば —あいさつ語を中心に—」『日本語学』9-4 明治書院
- 渡辺友左（1981）『隠語の世界—集團語へのいざない』南雲堂

[illegible]

